

Title	市場の中の家族 - 有料老人ホームの事業コンセプト -
Sub Title	
Author	岸本尚毅(Kishimoto, Naoki) 田中滋
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1988
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1988年度経営学 第594号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001988-0594">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001988-0594</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 岸 本 尚 毅  
(東京電力株式会社)  
所属ゼミナール 田 中 滋 研

主査 田 中 滋  
副査 石 田 英 夫  
藤 枝 省 人

## 市場の中の家族 —有料老人ホームの事業コンセプト—

顧客の人生における有料老人ホームの意味は、事業者にとっても検討を要する問題である。たしかに有料老人ホームにより、家族に依存せずに便利で快適な生活と老後の安全・安心をしかるべき対価で購うことができる。しかし、それをもって、「死後の社会参加」というニーズに応える永代供養サービスと同様、家族の働きを代替するサービスの提供とだけ考えてよいのであろうか。

家族の存在そのものが生き甲斐かどうかは分析の外に置き、経済的にのみ考えると、夫婦で暮らすあるいは二世代がともに暮らす形態には、生活コストの上でメリットがある。一方、勤労者の退職後は、在職中に比べ、所得よりも余暇を選好する傾向が強まると考えられる。現在の有料老人ホームでの生活は、他の形態の生活様式と比べ、相対的に高コストである。しかし、人生に残された時間を、家事から余暇へと買い戻す価格と考えれば、必ずしも高価だとはいえない。

こうした視点から、有料老人ホームは、家族の経済的なメリットを生かしつつ、その働きを補完し、さらに自己実現への条件整備にあたっての多様性を提供する商品だという考え方方が成り立つ。自己実現の内容そのものは、まだ会ったこともない深窓の姫のように把握しがたいものであるが、有料老人ホームは、自己実現のための人生の戦略の中で、家族の全体的な効用を高める手段と位置付けられる。